

第3回環境被害に関する国際フォーラム

セッション2 問題解決に向けて

グラッシーナロウズ水銀汚染の状況

ジュディ ダ シルバ*

カナダ先住民 グラッシーナロウズ代表

皆さま、こんにちは。私はグラッシーナロウズから参りました。今回のこの機会を与えられたことを、花田先生、それから、井上ゆかりさん、田尻雅美さん、皆さま方のご準備、大変感謝しております。

私は、これまで、水銀にずっと苦しめられてきました。今日、皆さん、マーヴィン マクドナルドさんの話を聞かれましたが、マーヴィンが住んでいるコミュニティ（ヴァバシムーン）と、私の住んでいるコミュニティ（グラッシーナロウズ）は、いわば姉妹関係にあたります。私の住んでいるコミュニティは、水銀を垂れ流したドライデンの製紙工場から200キロメートル下流にあります。そして、マーヴィンのところはさらにその下流に位置しています。マーヴィンがすでに皆様にお話をしました歴史的な話を私は繰り返そうと思いません。

グラッシーナロウズはどういうところに位置しているかといいますと、地図上ではほとんどカナダの中心にある、と言っていいでしょうか。約800人の人口の村です。

私の父は亡くなりましたけれども、ロバート キージックといい、私たちのコミュニティの長老でした。

私は皆さんに、この汚染と環境破壊に対してこれまでどのように闘ってきたか、ということをお話したいと思っています。私たちはたくさんの反対運動、抗議活動をしてきました。オンタリオ州の州都トロントをご存知だと思いますけれども、私たちのコミュニティから2,000キロぐらい離れたトロントのような大都市にも行ってまいりました。

私のコミュニティ、地域の中で抗議行動をしていますが、誰も私たちのことに耳を傾けないでしょう。結局、トロントなどというもちろん大きな都市に行けば私たちの訴えというものがより大きく増幅されて人々の耳に届くだろうと期待しています。

私たちのこれまでの動きというものを支援してくれた仲間たち、そして同調してくれた人たちがなければ、私たちの活動はここまで続けてくることはできませんでした。マーヴィンも先程申し上げましたけれども、亡くなった原田先生のお力、そして花田先生のお力。この先

*カナダ・オンタリオ州の先住民居留地の一つ、グラッシーナロウズに1962年に生まれ育つ。Grassy Narrowsは、正式にはAsubpeeschoseewagong First Nationとよばれる先住民居留地の一つ。水銀汚染の被害者として補償を受けている。女性のリーダーとして、先住民の知の継承者であり語り手として知られ、また水系保護、森林伐採反対運動の先頭に立ち、国内外で活躍。

生方のお力がなければ、私たちの訴えというものは、このようにはみんなの耳には届いてなかったと思います。

環境破壊と村の生活

2017年、オンタリオ州政府は8,500万カナダドルを、川を浄化するための資金として提供しました。このイングリッシュ・ワビグーン・リバーですけれども、その製紙工場があるところから400キロメートルぐらい離れていて、そして私たちの町があります。

9,000キログラムという大量の水銀が底質には含まれています。ですから、先程申し上げました、8,500万ドルというのは決して十分な金額とは思えません。

私たちは、この川の汚染に抗議する様々な運動をしてきています。当然、抵抗するということは私たちのたいせつな活動の1つです。また、2016年には、コミュニティの健康についてのアンケート調査を行いました。というのも、人々は、水銀による中毒にあまり気づいていないというところがあったからです。

子供を作るときにやはり親戚同士で結婚して子供たちを生んでいるから、そのために病気になっているんだ、というようなことを専門家が言ったりしています。こういった専門家たちは私たちが水銀中毒で侵されているということを、決して認めようとはせずに、べつの理由を色々と述べてくるわけです。

私たちの暮らしを取り巻いているのは森林、森でした。その森林を全て伐採をしてしまって（写真）、土壌がむき出しになり、風化する花崗岩から水銀の毒が現れてきます。そのためにここに生きていた動物たちは生きる術がなく、死んでいきます。このような状態を作り出しているのが、州政府、あるいは、カナダ政府です。ところが、彼らは、様々な持ち上がってきている環境や健康の問題に対して全て否定してきています。



写真 グラッシーナロウズ伐採工事跡

彼らは、巨大なトラクターを使って土地を開拓していきます。若い世代はトラックの前に

立ちをだかつて伐採工事を止めようとししました。私たちは、トラックが私たちの土地に入っ
てこないように道路にバリケードを築いて抵抗しています。森林を伐採してしまった後は、
何もなくなってしまいます。湖は、汚染され油が浮いています。当然、動物はこのような状
態のところでは生息することはできません。ですから私たち、生活の基盤そのものが自然では
なくて、町の生活に求めていかなければならなくなりました。

私たちは2010年、日本、東京を訪れまして、関東ウタリ会や東京アイヌ協会の人たちと出
会い、日本の先住民アイヌの人たちと交流し話し合いをしました。

私たちがこのような活動を続けていることで、国際的に人々の注目を浴びるのではないかと
思っています。そうして、我々の連邦政府の首相が、問題を初めて認識していくわけです。
私たちは、私たちの聖なる伝統に火を灯し、そして私たちは、私たちの母なる大地を守って
いく、という活動をしてるわけです。

私たち、これまでに大都市のトロントで、River Run というプロテスト運動をしまいいり
ましたけれども、2016年が4回目になります。

このプロテスト活動の時には3,000人の人が参加しました。州の州都になりますね。議会
ビルに通じる道路に大きな字で「NATIVE LAND RIGHT'S NOW」(先住民の大地の権利
をいまこそ)と書きました。これが私たちの主張です。

オンタリオ州政府や連邦政府が、森林伐採の環境影響について調査をしたり先住民に説明
することはありません。オンタリオ州政府は、森林伐採によってお金が入ってくるわけで、
環境調査のようなものはしてない。あまり、詳細にわたって調べていくと、問題がいろいろ
出てくるから、ということだと思います。

われわれのコミュニティの若者の生活

みなさん方、2004年に熊本学園大学が初めて原田正純先生を中心に調査団を組んで、グ
ラッシーナロウズに調査に来られた時には、検診をしている集会場の周りに子供達がたくさ
んいたと思います。その当時遊んでいた子供たちは、もう大人になっていますが、現在やは
り社会的な問題をいくつか抱えています。若者世代全体を見たときに、決してハッピーな毎
日を送っているとはいえ、いろいろな面で苦しんでいます。特に、精神的なダメージも大き
く、悲しみに溢れた彼らの生活があります。ただ、私の姪や甥もその世代で、あまり詳しく
彼らのことを話すことはできません。

子供達はもちろん学校には行きますけれども、あまり長続きせずに行かなくなってしま
いますし、またこの若者たちに仕事の機会もなかなか与えられず、将来の見えにくい状況にあ
ります。

また、先生がたがおいでになったころ、ヘラジカや狼、クマなど野生の動物たちがたくさ
ん生息していたと思うんですけど、今、全く姿を見かけません。全くおりません。

私の子供たちが私に言うのですが、動物はいちはやく、この土地自体が病だ、病にかかっ

ているということを察して、より健康な土地へと移動していったんだ、でも私たち人間はまだここに住み続けている、という状況です。

先生がお見えになった時に、先生と一緒に話をした当時大人だった人たちの多くの方がもうすでに亡くなっています。かなり若い年齢で亡くなっていかれた、というのが現実です。

参考文献

- ・原田正純、花田昌宣、田尻雅美ほか「カナダ・オンタリオ州先住民地区における水銀汚染－カナダ水俣病の35年間」『水俣学研究』第3号、熊本学園大学水俣学研究センター、2011年。
- ・水俣学研究センター編『水俣からのレイトレッシン』熊本学園大学水俣学ブックレットNo.9、熊本日日新聞社、2013年。